



桜一第1号  
令和5年4月7日

桜岡小学校ホームページ <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/sakuraoka>

学校教育目標「共に生きることを喜ぶ かしくく たくましい子に育てます」

～みんなとつながる・みんなでやりぬく・光かがやく さくらっ子～

学校長 後藤 俊哉

玄鳥至（つばめきたる）候となりました。昨年に引き続き春の訪れが早く、校庭の桜が散り始めています。春爛漫の季節を迎え、令和5年度が始まりました。引き続き本校の校長を拝命しました。よろしくお願いいたします。

昨年度、子ども達のすてきな姿をたくさん目にしました。1年生の生活科や幼保小交流、2年生のまちとの関わり「港南郵便局」、3年生の地域の見学で知った「お店のひみつ」、4年生の「服のチカラ プロジェクト」、5年生の

「GIGA アンサンブルコネクション」、6年生の「鯖カレー」の開発・販売、5・6組の「フードドライブ」などができたことは大きな成果です。「やり抜く力」が少しずつ身に付いてきたといえるでしょう。また、共に学び合う中で「学びの真顔」や「学びの笑顔」が生まれてきました。その中で「対話的で深い学び」を求め、授業研究会では具体的な子どもの姿で語り合い、ビフォーアフターの姿を比較することで資質・能力が身に付いたかを共有してきました。



早稲田大学 教授 藤井千春氏は「子どもの学び」について以下のように述べています。

「学習」とは、所定時間に、所定の知識・技能を習得する活動である。

「学び」とは、新しい知識・技能を習得して、生活における見方・考え方を拡張・深化・充実させることである。

「学び」には、それまでよりも「世界」（ひと・もの・こと）と広く・深く・豊かに関わり合えるようになったという、自己の成長についての実感が伴う。

「学習」は授業における本質的な要素である。しかし、「授業」を自分の「学び」として意識できなければ「授業」は特殊な空間での架空の作業にすぎなくなる。「授業」は「子どもの学び」に連続しなければならない。

重要なことは、子どもたちが「学習」を契機として、自らの生き方が恒常的に変容したと実感できることである。「世界」とより互恵的に関わり合えるようになったという、自分の成長の感覚を得られることである。

『「授業研究」をつくる』教育出版 2020. 2 第7章より

このように今年度は、子どもたちが相互に「わかり合おう」として、「自分の言葉」で語り合い、聴き合う活動を大切にしていきます。「自分の言葉」とは自分に固有な体験に根ざしてその意味を理解している言葉です。発言者が自分の日常生活で体験した出来事や感情などを事例や比喩として説明を試みている時に語られる言葉です。友達に自分の考えや気付きなどを「わかってもらいたい」という意識で語る時、相互に「わかり合える」ような、「子どもの学び」を生み出していきたいと思えます。

今年度の学校経営方針等については、5月30日（火）学校説明会にてお伝えします。

「一人ひとりが光かがやくため」に教職員一丸となってがんばります。一年間よろしくお願いいたします。